

# 『狭衣物語』から『在明の別』へ

——承香殿の女の挿話を讀む——

井 上 新 子

## はじめに

『在明の別』巻一におけるクライマックス、突然の帝との逢瀬が出来し、女大将の男装が露顕する直前と直後には、やや唐突なかたちで女大将と承香殿の女との和歌の贈答場面が置かれている。「月」を詠むささやかな挿話である。

当該のやり取りについては、『今とりかへばや』巻二の女大将と麗景殿の女との交渉の場面が影響を及ぼしているという指摘がすでになされている。<sup>①</sup>『今とりかへばや』の場合、女大将の失踪直前、つまり男装解除直前の場面であり、男装が露顕する直前の『在明の別』の当該場面と同じものがある。実際は女性であることを知らずに女大将

を慕う宮中の女と女大将との「月」をめぐる贈答であることも共通している。『在明の別』の当該の挿話は、『今とりかへばや』の形象を一つの源泉として成り立っている。

ただし、そこで詠まれた歌の表現をながめると、両者には「月」・「見る」以外の共通点が見出せない。男装の女主人公を、それと知らずに憧れる女という物語の構図は継承するものの、表現面における繋がりには薄いのである。和歌の表現に着目するなら、『在明の別』の当該二つの場面の贈答歌には、『今とりかへばや』だけでなく、『狭衣物語』巻四の狭衣と源氏の宮との間で交わされた二つの贈答歌も影響を及ぼしているのではないかと、稿者は考える。『在明の別』当該場面と『狭衣物語』との繋がりには意外に深いのではないか。<sup>②</sup>その繋がりには、両物語の主人公である、狭

衣と女大将との共通性をも浮かび上がらせると思量する。

以下、当該場面における二つの物語の繋がりの様相を検討し、『在明の別』が『狭衣物語』を継承しながら、新たな物語を紡いでいった有り様について考察したい。

## 一 『今とりかへばや』の麗景殿の女の挿話

『狭衣物語』と『在明の別』との繋がりを検討する前に、『今とりかへばや』と『在明の別』との共通点と相違点をあらためて確認しておく。

『今とりかへばや』の女大将と麗景殿の女とのやり取りは、以下のようなかたちで女大将の失踪直前に配されている。

内裏の御宿直なるに、二十日あまりの月もなきほど、  
闇はあやなしとおぼゆるにほひにて、五節の頃、「な  
べてかたきの」とありし人を思ひ出でて、殿上人など  
しづまりたるに、麗景殿のわたりをいと忍びやかに立  
ち寄りて、

冬に見し月の行方を知らぬかなあなおぼつかかな春  
の夜の闇

と、末つ方おもしろくうそぶきたるに、ふとさし寄り

て、

見しままに行方も知らぬ月なればうらみて山に入  
りやしにけん  
と答ふる、ありしけはひなり。

（『今とりかへばや』巻二 三〇九～三一〇頁）<sup>③</sup>  
『今とりかへばや』巻二の巻末に置かれている当該のくだりは、男袈袢と妊娠という運命の大激変に見舞われた女大将が女姿に戻る直前の挿話である。自らの男としての生と決別するにあたり、女大将は三年前に一度歌を交わしたことのある女（巻一 一九六～一九九頁）の許に立ち寄り、「冬に見し」歌を詠みかけた。男としての女大将に惹かれる女を装ね、彼女の変わらぬ心を確認することには、この世からいなくなってしまう「男としての女大将」を自ら哀惜する意も込められているのであろう。すでに指摘されているようにこのふるまいは、その場所が宮中であることとや、贈答歌に「月」が詠み込まれていることも相俟って、後に検討する『在明の別』巻一の承香殿の女との語らいと相通じるものがある。

一方、両物語の間にはいくつかの差異の存する点も見逃せない。『今とりかへばや』の場合、三年前に歌を交わし

た麗景殿の女を訪れる設定になっていて、三年前の贈答歌には「月」が詠み込まれていない。これに對し『在明の別』では、男装露頭という事件を挟むかたちで二組の贈答歌が配され、いずれの歌にも「月」が詠み込まれている。加えて「月」・「見る」以外、両物語の和歌表現には共通性が希薄である。また『今とりかへばや』の場合、女大將詠の「月」も麗景殿の女詠の「月」もともに麗景殿の女を指している点が留意される。

もつとも『在明の別』が『今とりかへばや』の設定に變形を加えながら、自らの物語の叙述に取り入れたことは動かないだろう。けれども、両物語のいくつかの差異を考慮すると、『在明の別』の当該の叙述へと繋がるもう一つの先行文学として、『狭衣物語』巻四の狭衣と源氏の宮との贈答歌の存在が浮上する。以下、『狭衣物語』巻四に配された二組の贈答歌を組上に載せたい。

## 二 『狭衣物語』の「袖の月」

『狭衣物語』巻四の中盤、狭衣を次の帝とすべきという天照神のお告げが斎宮にもたらされた。これを受け、狭衣は二世源氏であるにもかかわらず、俄かに帝位につくこと

となった。帝となつてしまえば、現斎院である源氏の宮の許を気軽に訪問することは叶わなくなる。狭衣は即位の前に、長い間変わらぬ思慕の情を寄せてきた源氏の宮を訪れ、以後の再会の難しさを嘆くのであった。この折に交わされた贈答歌に注目する。贈答歌を含む場面を以下に掲げる。

### ① 『狭衣物語』巻四（即位前）

あさましき心の中の、かけかけしき方さまをば、今はいかなりとも、思し寄るべきならねど、水の白波なる御ありさまを、雲のよそにのみ思ひやりきこえさせたまはんには、長らへぬべからん命のほどなりとも、いかがと、思し続けて、月の顔をのみ眺めさせたまへり。

めぐりあはん限りだになき別れかな空行く月の果てを知らねば（A）

とて、押し当てたまへる袖のけしき、限りある世の命ならぬには、げに、さ思しめさるらん。あまりまばゆければ、御几帳ひき寄せさせたまひて、やをら入らせたまふ紛らはしに、

月だにもよその村雲へだてずは夜な夜な袖にうつ

しても見ん(B)

と、なほざりに言ひ捨てさせたまふ、慰めばかりも、  
げに、なかなか思ひ離れぬ絆ともなりぬべし。

(②三四七―三四八頁)<sup>(5)</sup>

狭衣詠(A)の「めぐりあはん限りだになき別れ」は、  
この訪問が二人の今生の別れとなるかもしれないという危  
惧を背景とする。一首は、「空行く月の果てを知らねば」  
という狭衣自身の未来の不確かさの自覚と相俟つて、長く  
報われなかった相手と、もう二度と会えないかもしれない  
という狭衣の強い不安と嘆きを詠んでいる。そうした切羽  
詰まった狭衣の詠歌に触発されてか、狭衣が帝位につき宮  
中に住まうようになってしまえば対面することもなくなる  
という安心感からか、源氏の宮は「月だにも～夜な夜な袖  
にうつしても見ん」(B)と返す。狭衣を思わせる「月」  
を夜毎に涙に濡れた袖に映してながめます、とする源氏の  
宮の詠歌からは、狭衣への源氏の宮の恋情までも漂う。長  
年、狭衣の恋慕を退けてきた彼女の姿勢とは異質な言葉の  
世界が形成されている。恋愛関係に発展する機会が完全に  
遠のいたという現実が、こうした親密な表現を選択する心  
の余裕を源氏の宮に与えているのであろう。

当該場面は、狭衣の宮中入りを前に、万感の思いを込め  
た別れの時を刻んでいる。その中で、以後狭衣と会えなく  
なることを惜しむ(実際は会えなくなるおかげで、安心し  
て会えなくなることを惜しむことのできる)源氏の宮の詠  
歌に、「袖の月」が形象された点を確認しておきたい。

このち、狭衣はついに即位する。一品の宮は内裏参入  
を拒み、故式部卿宮の姫君も懷妊のため参内できない。宮  
中にて無聊をかこつ狭衣帝は、源氏の宮に消息を送る。こ  
の場面における贈答歌に注目したい。当該贈答歌を含む場  
面を以下に掲げる。

②『狭衣物語』巻四(即位後)

月いと明き夜、端つ方におはしますに、隈なうさし入  
りたるを御覧ずるにも、かの、「夜な夜な袖に」と、  
のたまはせし御けはひ、まづ思ひ出でられさせたまひ  
て、いみじう恋しうおぼえさせたまふに、さやかなり  
つる月影も、やがてかき曇る心地せさせたまひて、い  
とど心も空になりぬ。

「恋ひて泣く涙にくもる月影は宿る袖もや濡るる  
顔なる(C)

村雲晴れ果つめるを、いかやうにてか、只今、かく御

覧ずらむと、ゆかしう」などやうにて、近う候ふ殿上  
童を、たてまつらせたまへれば、げに、雲の上は、ま  
いていかにと、思しやらせたまへる秋の月影なれば、  
をかしき御消息なれど、待ち見たまはんけしき、恥づ  
かしう思しやらせたまへど、今は、人づてに聞こえさ  
せたまはんもあるまじき事なれば、

あはれ添ふ秋の月影袖馴れておほかたとのみなが  
めやはする (D)

とばかりほのかなり。 (②三五五～三五六頁)<sup>(6)</sup>

ひとときわ明るい月の光を見て、狭衣は「夜な夜な袖に」  
(前掲①B)と詠じた源氏の宮の氣配を思い出す。彼女を  
ひどく恋しく思い、「恋ひて泣く」歌 (C)を詠じて、彼  
女に届けさせた。当該歌は、源氏の宮の①B歌を踏まえ  
て、「月影」の「宿る袖」を詠み込んでいる。源氏の宮へ  
の恋情のために涙を流す狭衣。その「涙にくもる月影」が  
源氏の宮の「袖」に「宿る」とする。この「月影」も狭衣  
に関わるものとして詠まれている。「袖に宿る月」の発想  
は、源氏の宮による返歌「あはれ添ふ」歌 (D)にも「秋  
の月影袖馴れて」という表現となつて現れ、源氏の宮も涙  
で袖を濡らしていることを伝えている。

以上のように、狭衣の宮中入りを境にその前後で交わさ  
れる、狭衣と源氏の宮との贈答歌には、一首をのぞき「袖  
に宿る月」が詠み込まれている。次にこの二組の贈答歌と  
『在明の別』の二組の贈答歌との連関について検討したい。

### 三 『狭衣物語』から『在明の別』へ

『在明の別』卷一の女大将と承香殿の女との二組の贈答  
歌は、帝により女大将の正体が暴かれ、逢瀬が成立してし  
まうという、女大将としての生が存立し得なくなる事件を  
挟むかたちで物語の中に配されている。検討した『狭衣物  
語』の二組の贈答歌が、この世における立場が人臣から帝  
へと大きく変わる狭衣の生の激変の前後に配されたことと  
も、一脈通じるものがある。以下に、男装露顕直前の、  
女大将と承香殿の女との間で交わされた贈答歌を含む場面  
を掲げる。

#### ③ 『在明の別』卷一 (承香殿の女の挿話・前半)

八月十五夜の月の宴ありて、例の暁近く紛れ出で、御  
ゆるされがたき御いとまなれば、人に知られず、しの  
びたるかたよりのがれ出で給ふに、承香殿の細殿の前  
を過ぎ給へば、入りがたの月影に、山の端近くなり

て、くまなきひかりなれども、こなたはもののかげにて、ことにけちえんならねど、いとしるき御姿を例の見すぐさで、御隨身なども数多からず、さきもおはせ給はぬに、例よりはひまある心ちして、御簾をいたく押し張りたるはあやしと、目とどめ給へるに、

時のまも袖にうつして馴れ見ばや雲居にすぐる月のひかりを（E）

といふ声、いと若やかにあてに聞こゆるも、誰ばかりとにくからず。

雲居にてうはのそらなる月影をいづれの袖とわきてたづねん（F）

とて、しばしたちどまり給へるは、いかばかりめづらしからん。

（三四〇頁）

八月十五夜の宮中の月の宴ののち、女大將は退出する。その際の贈答である。女大將は、直前に迫った自らの運命にはもちろん氣づくよしもない。「承香殿の細殿の前」を通り過ぎると、女大將の、男としての美しい姿に惹かれる女が「時のまも」歌（E）を詠みかけた。女大將を「月のひかり」に喩え、ほんの少しの間でも、その「月のひかり」を私の袖に映して馴れ親しみたいものです、と女大將

への恋慕の情を表わすのであった。これを受け、女大將は「雲居にて」歌（F）を返歌する。こちらにも「袖の月」の発想を受け継ぎ、女大將が自らを「うはのそらなる月影」に喩えている。<sup>⑨</sup>宮中において心落ち着かない自身を吐露し、女の「袖にうつして」をやんわりと否定する答えになっている。

当該場面の語りには、涙についての言及がない。しかしながら、贈答歌においては「袖に置く涙に映る月」が詠み込まれている。稿者はこの現象を、使用されている和歌表現の類似に着目し、先に検討した『狭衣物語』の贈答歌の影響という観点から捉えてみたい。あらためて、『狭衣物語』作中歌と『在明の別』の当該二首との共通性を確認する。

時のまも袖にうつして馴れ見ばや雲居にすぐる月のひかりを

③『在明の別』E歌

雲居にてうはのそらなる月影をいづれの袖とわきてたづねん

③『在明の別』F歌

月だにもよその村雲隔てずは夜な夜な袖にうつしても見ん

①『狭衣物語』B歌

あはれ添ふ秋の月影袖馴れておほかたとのみながめや

はする

②『狭衣物語』D歌

『在明の別』の承香殿の女の詠歌（E）の「袖にうつして」は、『狭衣物語』の源氏の宮の詠歌（B）「袖にうつして」と共通する。加えて「袖にうつして馴れ見ばや」は、『狭衣物語』の源氏の宮の詠歌（D）の「袖馴れて」と類似している。当該部分にのみ登場する珍しい表現ではないものの、こうしていくつかの共通点が見出せることから、両者の間の繋がりの深さがうかがえよう。そうした眼でながめると、E歌の「時のまも袖にうつして馴れ見ばや」は、B歌の「夜な夜な袖にうつしても見ん」を踏まえ、「夜な夜な」を「時のまも」に変形させたものではないか。『狭衣物語』の源氏の宮は、帝となり宮中に住まう狭衣と直接会えなくなるために、狭衣を彷彿とさせる「月」を「夜な夜な袖にうつ」すことで彼を偲ほうとしていた（実際は、会えなくなることが源氏の宮に平安をもたらしただけであることは先述した）。一方『在明の別』ではこの表現を踏まえ、「時のまも」つまり、ほんのひとときでも女大将と繋がっていたい承香殿の女のせつない恋心を表したのではないか。なおF歌も「袖」・「月影」が詠み込まれ、「袖にうつる月」の発想のもとに一首が構成された

点は見逃せない。

女大将の男装露頭、帝との逢瀬の直後に、再び交わされる承香殿の女との贈答歌についても見てみよう。

④『在明の別れ』巻一（承香殿の女の挿話・後半）

ただ夢ばかりのなげの御言の葉にも、かかりそめぬるかぎりは、いかでいまひとたびとのみ心をつくしきこゆるならひにて、よべも出で給はずと見しに、かの戸口はささざりけり。あけながらながめけるほど見えて、うち嘆くなり。「かやうのまじらひも、いま幾夜かは」とおぼさるれば、なほ人にしのばれまほしきなげのすさみにや。

忘るなよ夜な夜な見つる月の影めぐりあふべきゆ  
くへなくとも（G）

過ぎがてに、いふともなき御けはひを、げにとびたつばかりぞ思ふべき。

めぐりあふひかりまでとはかけずともしばしもや  
とをありあけの月（H）

とまで思ひけるこそいとほしけれど、心地かきみだりなやましければ、あけはてぬさきにといそがれたまふ。

前掲の承香殿の女とのやり取りののち、一夜にしてその生が一変してしまった女大将。この先、男装のまま宮廷に出仕することはできなくなると、男装との決別を胸に秘めるに至る。そのため、この今の男としての自身の姿を覚えていて欲しいと承香殿の女に詠みかけたのが女大将の「忘るなよ」歌（G）、これへの承香殿の女の返歌が「めぐりあふ」歌（H）である。当該二首と『狭衣物語』の作中歌との関連を確認する。

忘るなよ夜な夜な見つる月の影めぐりあふべきゆくへ  
なくとも

④『在明の別』G歌

めぐりあふひかりまでとはかけずともしばしもやとを

ありあけの月

④『在明の別』H歌

めぐりあはん限りだになき別れかな空行く月の果てを  
知らねば

①『狭衣物語』A歌

月だにもよその村雲へだてずは夜な夜な袖にうつして  
も見る

①『狭衣物語』B歌

G歌とA歌は、そもそも「忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」（『伊勢物語』十一段<sup>⑩</sup>）を踏まえている。G歌とA歌において「めぐりあふ」の語が共通するのは、両歌が同じく『伊勢物語』の「忘るなよ」

歌を踏まえているためであろう。けれどもG歌には、「夜な夜な見つる月」という表現も見られ、『狭衣物語』のB歌との繋がりも同時に注目される。もちろん「夜な夜な」月を見る」と詠む例は、たとえば「あかなくによなよなつきをみつるかなさらずはおいやつもらざるべき」（『教長集』四〇七番<sup>⑫</sup>）のように、多くはないものの存する。そうした状況を勘案するとしても、これまで検討してきた他の個所の類似をも視野に入れると、『在明の別』のG歌の「夜な夜な見つる月の影」は『狭衣物語』のB歌の「夜な夜な袖にうつしても見る」を意識した表現である可能性が高いのではないかと考える。

なお『在明の別』のH歌の「しばしもやとを」については、誤写を想定して「しばしもやどれ」あるいは「しばしもやどせ」が本来の形であった可能性が大きいと指摘されている<sup>⑬</sup>。そうであるなら、この承香殿の女が詠んだH歌の「しばしもやどれ」もしくは「しばしもやどせ」は、前日に彼女が詠んだE歌の文脈を直接受けるものであった可能性が浮上する。すなわち、E歌の「月のひかり」を「袖にうつして馴れ見ばや」という願望を重ねて示したのが、「しばしもやどれありあけの月」もしくは「しばしもやど



せありあけの月」であつたのではないかということである。E歌の「月のひかり」を受けたのがH歌の「ひかり」だつたのではないか。H歌も「袖の月」の発想のもとに詠まれた可能性が考えられる。

以上の確認し得た表現の共通性により、『在明の別』巻一の女大将と承香殿の女との間で交わされた二組の贈答歌は、『狭衣物語』巻四の狭衣と源氏の宮との間で交わされた二組の贈答歌と密接な関連のもとに形成されたと捉えておきたい。

#### 四 運命の予告と万感の別れ

検討してきたように、表現面において密接な関連の見出される『狭衣物語』と『在明の別』のおのおののくだりは、二組の贈答歌の間に主人公の生の大きな転換が置かれた点においても共通していた。『狭衣物語』を踏まえたことは、『在明の別』の物語世界にいかなる効果をもたらしているのか、さらに追究したい。

『狭衣物語』の場合、狭衣の即位は贈答歌の交わされる前にすでに決定している。狭衣の宮中入り直前、今生の別れになるかもしれないという覚悟のもとに狭衣による源氏

の宮訪問が実行され、贈答歌には避け得ない別れの嘆きが詠み込まれていた。この『狭衣物語』の表現を踏まえる『在明の別』の承香殿の女の歌(③E歌)は、女大将への承香殿の女の恋慕を表出したものでありつつ、あわせて別の文脈をも呼びこんでしまうのではないかと思量する。すなわち、狭衣の宮中入りにともなう別れを形象する表現を踏まえることにより、女大将としてこうして承香殿の女に対面し続けることは不可能であろうことを、女大将の運命の変転により(はじめて歌を交わした間柄であるものの)別れが近いことを、読者にかすかに予感させる機能をも備えてしまふのではないかと考える。加えて、女大将が自身を喩えた「うはのそらなる月影」にも留意される。「月――うはのそら」を詠み込む和歌として、『源氏物語』夕顔巻の夕顔の女の詠歌、「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ」(①一六〇頁<sup>15</sup>)が想起される。当該歌において夕顔の女は、自身を「月」に喩え、下の句に自身の死の予感を込めていた。

これらの先行文学の織りなす表現を勘案すると、突如物語の叙述に現れた『在明の別』の承香殿の女の挿話(前半)は、女大将における男としての生の終わり、彼女が大

将として交流してきた人々との別れを予告するものであったとも捉えられるのではないか。もちろん、このことはこの挿話（前半）の直後に出来る男装露顯や帝との逢瀬によつて物語の現実となるまで、はつきりとした像を結ぶわけではない。あくまで運命の激変の密やかな暗示にとどまるものとして、物語の中に置かれたと考える。

承香殿の女の挿話の後半部分、女大將の男装露顯直後に配された贈答歌は、「忘るなよ・「めぐりあふべきゆくへなくとも」に女大將のこの世への未練と決別が託されている。その思いを伝える相手は、昨晩はじめて和歌を交わした承香殿の女であり、相手との関係の浅さを思うと切実さがやや薄いようにも感じられる。『狭衣物語』の深刻な別れの世界を重ねることにより、自身のこれまでの生へのせつない決別の意志と嘆きがより強く発信されるのではないか。『狭衣物語』の言葉の導入により、万感の別れの空間が演出されていると考える。

そもそも両物語において、問題にした二組の贈答歌が詠まれた季節は秋であった。とりわけ『在明の別』では、「八月十五夜」とその翌日として設定されている。ちなみに『今とりかへばや』の麗景殿の女の挿話は、「二十日あ

まりの月もなきほど」（三〇九頁）、三月下旬であった。『狭衣物語』と『在明の別』に共通して「秋の月」が描出された点は重要であろう。狭衣についても女大將についても、その〈かぐや姫〉性が指摘されてきたことが思い合わせられる。『狭衣物語』と『在明の別』における二組の贈答歌は、〈かぐや姫〉の進退（月の都）への昇天）及びこの世との別れのモチーフに緊密に関わり形象されたものである点においても共通していると考ええる。狭衣が臣下の世界を離れ帝となり宮中に住まうようになることと、女大將が見破られ帝との逢瀬を余儀なくされ、やがて入内し宮中に住まうようになることは、物語の設定として相通じていよう。彼らの転身には、同時におのおののせつない別れが伴う。『在明の別』は、〈かぐや姫〉としての狭衣の宮中入りを意識しながら、狭衣と源氏の宮との「月」をめぐる別れの表現を、承香殿の女の挿話の表現の中に導入することによって、女大將の身に間近に迫った運命を密やかに予告し、さらにまた男装への切ない決別を演出したのだと解したい。

## おわりに

以上、『在明の別』巻一の承香殿の女の挿話が、『今とりかへばや』巻二の麗景殿の女の挿話のみならず、『狭衣物語』巻四の狭衣と源氏の宮の二組の贈答歌を踏まえて形成されたことを指摘し、両物語の交渉の有り様から、『在明の別』の物語世界について考察した。当該の挿話が『狭衣物語』を踏まえたことは、女大将の身に間近に迫った大きな運命の変転を密やかに予告し、男装への彼女の切ない決別を演出していると捉えた。

『狭衣物語』と『在明の別』の当該の二組の贈答歌は、多分に恋愛の雰囲気醸し出しながら、表向きは「男と女」の間で詠出されたものであった。けれども、前者は物理的に隔絶される男と女の間で、後者は女と女の間で交わされたものであった。男と女の恋愛に発展する余地のない間柄が提示された点においても、両物語は共通している。そうした状況下、和歌を交わすことでひとときの親密なコミュニケーションが成立した。逆に言えば、そうした状況下であるからこそ、ひとときの親密なコミュニケーションが成立し得たということではないか。この点に、両物語に

見出される思念の類似を捉えておきたい。また『今とりかへばや』の影響があるとは言え、『狭衣物語』の「男と女」を「女と女」へと変容させた『在明の別』の営為には、当該物語の象つた世界の特色の一端が顔をのぞかせていると考える。

『狭衣物語』の狭衣と『在明の別』の女大将とは、(かくや姫)性においても通じている。狭衣の場合、その昇天先が「宮中」となるも、周知のように帝としての生活は憂愁を抱えた惨憺たるものであった。女大将の場合もその昇天先が「宮中」として一時的に設定されたのであろう。女としてこの上ない身分となった彼女の生活が、過去の男装時代を懐かしむという(狭衣ほどでないにしろ)憂いを含んだものとなった点も、狭衣の生といくらか通じている。そうした共通性と差異とをさらに見つめていきたい。

『在明の別』への『狭衣物語』の影響に注目した本稿の考察は、一挿話の検討にとどまった。しかしながら、『狭衣物語』が『在明の別』の物語世界に及ぼした影響は、広くて深い。『狭衣物語』から『在明の別』へと継承され変容していったものについて、今後さらに追究したい。

注

(1) 原田(米田)明美「有明けの別れ」と「とりかへばや」(大槻修訳・注 全対訳 日本古典新書『有明けの別れ』ある男装の姫君の物語) 創英社 一九七九年、宮崎裕子「承香殿の女」の行方―『在明の別』における「とりかへばや」受容の一端―(『文献探究』四七号 二〇〇九年三月) が、『在明の別』巻一の承香殿の女の挿話に、『今とりかへばや』巻二の女大将と麗景殿の女との交渉の場面が影響を及ぼしていることを指摘している。

(2) 早く、中村忠行「解題(一)―先行物語との関係を中心として―」(古典文庫『有明の別 上』一九五八年) が、『在明の別』への『狭衣物語』の影響としていくつかの点を指摘し、両物語の関係の深さを示唆した。松浦あゆみ「『有明の別れ』における『狭衣物語』(引用) 論序説―作品後半の検討を通じた〈主人公〉のあり方の問題提起―」(横溝博・金光桂子編『中世王朝物語の新展望 時代と作品』花鳥社 二〇二三年) が、『在明の別』における『狭衣物語』引用の重要性を指摘し、事例を広汎にとりあげ論じている。ただし両論ともに、承香殿の女の挿話への『狭衣物語』の影響についての言及はない。

(3) 『今とりかへばや』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)に拠る。

(4) 注(1)の宮崎前掲論文。

(5) 『狭衣物語』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)。

巻四の底本は平出本)に拠る。のちに『在明の別』の作中歌とあわせて考察するため、狭衣詠と源氏の宮詠に便宜上記号を付した(『在明の別』の作中歌についても同様)。なお新潮日本古典集成(新潮社。底本は旧東京教育大学国語国文学研究室蔵『狭衣』春夏秋冬四冊本)では、B歌の第五句が「宿しても見む」となっている。日本古典文学大系(岩波書店。底本は内閣文庫本)は、新編日本古典文学全集本と同文である。

(6) 注(5)の新潮日本古典集成本では、D歌は「あはれ添ふ秋の月影袖ならでおほかたにのみながめやはする」となっている。日本古典文学大系本は、新編日本古典文学全集本と同文である。

(7) 『在明の別』の引用は、鎌倉時代物語集成 第一巻(笠間書院)に拠る。なお、表記は一部私に改めた。

(8) 大槻 修 訳・注 全対訳 日本古典新書『有明けの別れ―ある男装の姫君の物語―』(創英社 一九七九年)では、当該歌の「袖にうつして」を「私の袖に移して」と訳している。後述するように稿者は当該歌の趣向を、「涙が袖に溜まりそこに月が宿る様」を表わしていると考えているので、「映して」と解した。

(9) 注(8)の大槻前掲書が「うはのそらなる月影」は女を指すと解している。これに対し、金光桂子「『有明の別』の『有明の別』―題号の意味するところ―」(『文学史研究』四七巻 二〇〇七年三月)が、贈歌の「雲居にすぐる

月のひかり」を受け、「宮中にいても心落ち着かない私（右大将）」を意味すると解している。従いたい。

- (10) 『伊勢物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

- (11) 注（9）の金光前掲論文が本歌として『伊勢物語』の「忘るなよ」歌（『拾遺和歌集』四七〇番）を指摘している。

- (12) 歌集の引用は、新編国歌大観（角川書店）に拠る。

- (13) 妹尾好信「『在明の別』本文校訂覚書」（『中世王朝物語表現の研究』笠間書院 二〇一一年。初出は一九九八年二月）。

- (14) 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

- (15) 注（14）の新編全集①一六〇頁、注二。

- (16) 辛島正雄「『在明の別』覚書―女院の〈かぐや姫〉的性格について」（『中世王朝物語史論 上巻』二〇〇一年。初出は一九九〇年一〇月）、鈴木泰恵「天人五衰の〈かぐや姫〉―貴種流離譚の隘路と新生」（『狭衣物語／批評』翰林書房 二〇〇七年。初出は一九九七年三月）、他。

（本学日本語日本文学科准教授）